講演会記録

ウィーン世紀末文化とユダヤの人々

増　谷　英　樹

今日はオーストリアの首都であるウィーンの世紀末文化とユダヤの人々というテーマでお話したいと思います。「世紀末」といっても 19 世紀の世紀末のことで、いまから 100 年も前のウィーンの話です。また、日本語では「世紀末」といいますが、実際にはこの文化は 20 世紀初頭まで続き、ドイツ語では「世紀転換期　Jahrhundertwende」と云います。「世紀末文化」ないし「世紀末ウィーン」という言葉が日本で定着したのは、アメリカの社会学者カール・E・ショースキーの著作『世紀末ウィーン』（岩波書店）が翻訳されて以降かと思われます。ショースキーはフランス語の Fin-de-Siècle（世紀末）という言葉を使っています。この「世紀末ウィーン」という言葉は、ハプスブルク帝国の終焉と重なりあって、何となく終末論的感覚を感じさせるのか、日本では好んで使われていますので、ここではその用語を使用します。ときどき「世紀転換期」という言葉が出てきますが、ほとんど同義と考えて下さい。

都市ウィーンの位置と性格

さて、ウィーンの世紀末文化についてですが、その特性はどのようなものであるかは追ってお話しするとして、まずそうした文化がなぜどのように現れてきたのかを考えてみましょう。それは、このウィーンという都市の位置と性格に規定されています。ヨーロッパの地図を広げてウィーンの位置を確認してみましょう。ウィーンは東西の位置からいえば、チェコの首都プラハよりも東に位置します。そして南北においては、バルカン半島の根元にあります。第一次世界大戦の原因となったボスニア＝ヘルツェゴヴィナの「サライエヴォの銃声」がウィーンまで聞こえることはなかったとしても、現在ではウィーンからサラ

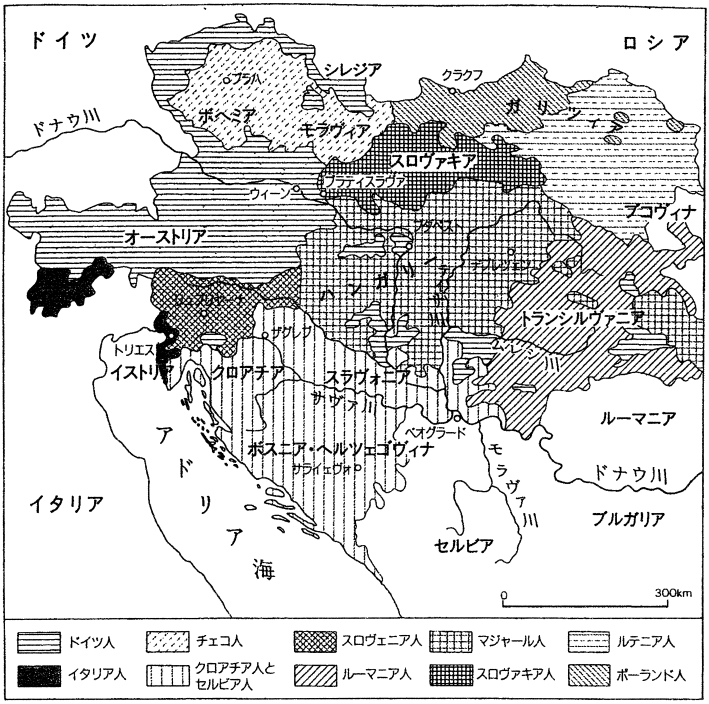

図 1. オーストリア＝ハンガリーの民族分布図
ウィーンの東南に偏した位置に注意

イエヴォへは車で半日で着いてしまいます。そのように、ヨーロッパの都市としてウィーンは極端に東南に偏しているといってよいのです。1529 年と 1683 年の二度にわたり、ウィーンはオスマン帝国の軍勢によって包囲され、とくに第二回の包囲のときには、ローマ教皇の激により「ヨーロッパ軍」が編成され、ようやくオスマン軍を撃退することができたのです。この戦闘によってヨーロッパは自らをキリスト教的なものと自覚するようになり、ウィーンはキリスト教ヨーロッパを守る東南の最前線の都市としての性格を与えられることになります。

しかし注意しなければならないのは、そうした対立面があるにも拘らず、同

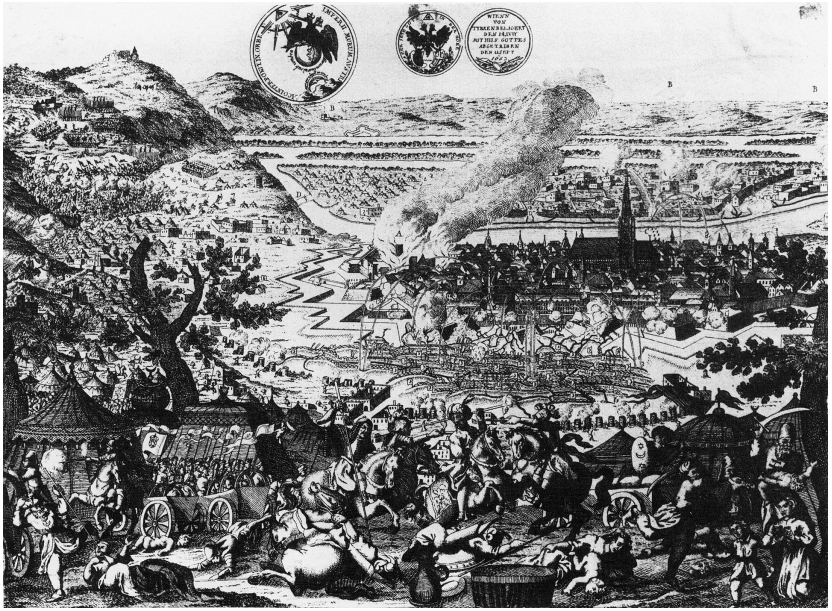

図 2.　1683 年オスマン軍による第 2 回ウィーン包囲の図。大砲や塹壕を掘っての攻撃が描れている。

時にウィーンが、交易や文化的交流を通じて、まさに東方との接触の玄関口でもあったことです。そして 18 世紀にいたるまで、東方はヨーロッパよりも優れた文化を誇っていたので、ウィーンはその影響を強く受けることになるのです。たとえば、ウィーンの王宮の宝物院には、ハプスブルク帝国の帝冠が麗々しくが展示され、見るものにその栄華を誇っていますが、この帝冠は実はイスタンブールで製作されウィーンに届けられたのです。宝石や金細工などの技術は、イスタンブールの方がはるかに高く、イスタンブールの宝物院の宝石類をみると、ハプスブルク帝国の王冠は、オスマン帝国の家臣の剣にちりばめられた宝石よりも小さな宝石しか使っていないのです。1683 年のオスマン軍による第 2 回のウィーンの包囲の後、オスマン軍が残していったテントの中から見つけだされたコーヒー豆からウィーンにもようやくオリエント流のカフェ文化が発展することになったというのも、あまり知られていない有名な話です。この

カフェ文化は、我々の「世紀末文化」の話においても重要な役割を果たします。それ以前に、このカフェ文化は、オスマン軍の旗印の三日月を型どってつくられた菓子パンとともに、マリア・テレジアの娘でフランスのルイ 16 世に嫁いだマリー・アントワネットによって、パリにもたらされることになります。その菓子パンはウィーンでは三日月と言う意味のキプファールと呼ばれ、フランス語ではクロワッサンと呼ばれました。

そうした東方の文化を吸収し、その後ハンガリーやチェコをその支配下に納めたハプスブルク帝国の首都ウィーンには、帝国各地の支配者である貴族が宮殿を建設し、そこにはそれぞれの地域の料理女や御者、従者その他の人々が雇われ、18〜19 世紀のウィーンは、底辺におけるまでまさに多民族ないし多文化都市としての性格を有していたのです。その性格は 19 世紀の後半ないし 20 世紀まで続き、ウィーンがドイツ人の都市として自己主張を始めるのは、19 世紀後半の民族問題の激化の時代、我々が問題にしようとしている世紀末になってからのことです。しかし、ウィーンがオーストリア共和国の首都となった 1918 年にいたるまで、ウィーンは決してドイツ人の都市とは言えませんでした。むしろ、このドイツ人の都市という主張に対して、中部ヨーロッパの多文化都市としての性格を主張したのが、ウィーン世紀末文化であったといってもよいのです。

城壁の意味の変化

さて、そうした多文化性を有するウィーンの世紀末文化は、どのように、何を契機にあらわれてきたのでしょうか。別の言い方をすれば、それはなぜこの 19 世紀の後半から世紀末ないし世紀転換期に出現したのでしょうか。その答えは単純ではありません。それどころか、文化の出現ほど歴史上さまざまな要素がからみあっている事象はありません。それでも、このウィーン世紀末の文化の発祥には、あきらかに検証できる二つの大きな要因がありました。その一つは、ウィーンがこの時期に、ハプスブルク帝国の帝都として、近代的な大都市として整備され拡大されてきたこと。そして第二に、大都市として拡大するに

図 3.　1840 年頃のウィーン。二重ないし三重構造がはっきりとわかる。

あたって膨大な流入民を受け入れたことです。

まず、ウィーンの大都市としての拡大がこの文化とどのように結びついていたかを見てみましょう。ヨーロッパのほとんどの都市と同様に、ウィーンは 1848 年に革命を経験します。1848 年革命は一般にヨーロッパ「近代の転換点」として理解されますが、ウィーンの歴史にとってもそれは一つの大きな転換点でした。実質的にハプスブルク帝国の最後の皇帝であるフランツ・ヨーゼフ 1 世が即位したのもこの革命の最中ですし、ハプスブルク帝国の崩壊の最大の原

因となった「民族問題」の根源もこの革命にもとめることもできます。この革命は都市としてのウィーンの発展にも大きな影響を与えます。革命には様々な局面があったのですが、1848 年の秋、9 月に革命的市民と労働者たちがウィーン支配し、皇帝とその軍隊をウィーンから追い出してしまうという局面が生じました。当然、皇帝軍は帝都であるウィーンの奪還のために、クロアチア軍まで動員してこれを包囲するという前代未聞の出来事がおきます。ヨーロッパの東南の守りであり、オスマン帝国の 30 万の軍勢を支えた城壁によって、いまや革命的市民と労働者そして女たちがウィーンを守り、これまでウィーンを防衛拠点としてきた皇帝軍がこれを攻めるというまったくの逆転的現象が出現したのです。結局皇帝軍が有り余る砲弾をウィーンに注ぎ込み、旧式の銃や砲しか持たない革命軍は敗北し、ウィーン革命は終焉を迎えます。

しかし、この出来事により、ウィーンの城壁の意味が問い直されることになります。オスマン軍の撃退、ハンガリーとの融和以降外敵のいなくなったウィーンの城壁は、防衛施設としてはほとんど意味のない無用の長物になっていました。城壁は、いまや王侯貴族やエリート層、大商人や金持ちの家主たちが住む城内(市内区)と、手工業者や営業者、小商人や庶民が住む城外(市外区)を隔てる社会的境界になっていました。たとえば、当時大金をためて城内のアパートに住むことは一つのステータスシンボルになっていました。革命はこの城内と城外の対立を鮮明にし、内部の敵にたいしては、城壁はむしろ危険な存在になっていることが明かになったのです。城壁の撤去の議論が始まります。城壁を管理していたのは皇帝でした。ようやく 1857 年になって、皇帝フランツ・ヨーゼフは城壁の撤去とグラシという斜堤を含む土地の一部を市民へ解放することを許可する勅令を発し、その開発を協議する「都市拡張委員会」を設置したのです。この決定がその後のいわゆる「リングシュトラーセ(環状道路)文化」を用意することになったのですが、事態の進展はそう単純ではありませんでした。

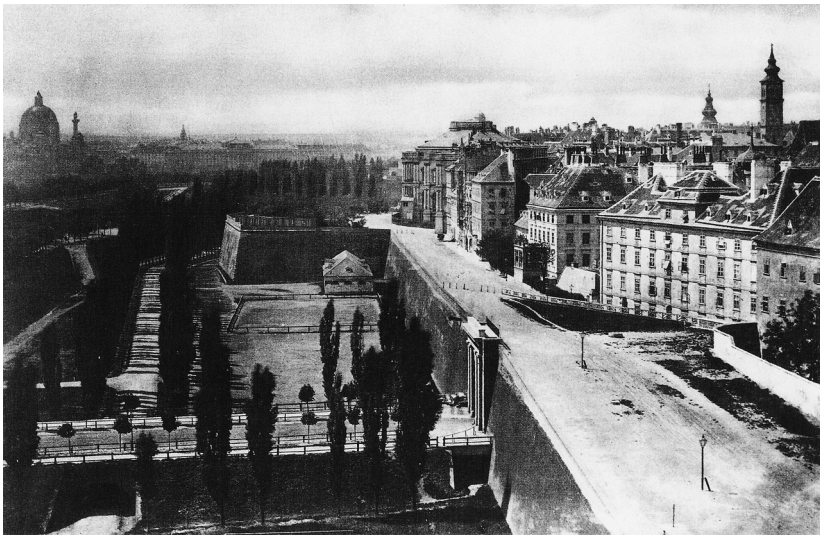

図 4.　シュトゥーベン門付近の市壁。右側の「市内区」と左側の「市外区」の落差は社会的なものでもあった。

リングシュトラーセ文化の成立

「都市拡張委員会」では、最初、軍部が主導権を握ります。軍部にはまだ1848年革命の悪夢が残っていて、彼らは、王宮や貴族の館、エリート市民の住む市内区を囲みそれを守ってきた城壁に代わって、これを守るための50 m幅の環状道路(リングシュトラーセ)の建設を主張しました。その三隅には新旧の兵舎が配置され、この環状道路を通じていつでも兵員が動員でき、王宮からはすぐにパレードができるような構造がつくられた。そうした意味でこのリングシュトラーセは軍用道路ないしパレード道路であったのです。さらに、ショッテン・リングの一隅には、軍隊の教会として、またイギリスのウェストミンスター寺院の機能を果たすべくヴォティーフ教会が建設され、それは当時の新聞記事によって「サーベルと宗教の支配」の象徴とされたのです。

そうした「リングシュトラーセ」が市民文化の表象の場とされるようになったのは、1860年代のイタリア戦線や対プロイセン戦争によって軍部の発言力が

図 5. リングシュトラーセ建設計画のコンペで採用されたプラン。後に軍の要求で変更が加えられた。

弱まり、産業の発展によってウィーンのブルジョアジーがその発言力を強化してきてからでした。リングシュトラーセには、市民の豪華なアパートや文化施設、公園などが設置されるようになってきました。当時その生活様式を貴族の生活に求めていたウィーンのブルジョアジーは、建築様式においても貴族の館や宮殿をまねてバロック様式を採用し、華美なデコレーションを施した建物を建てました。だから、このリングシュトラーセを歩いてみると、現在でもそうした新バロック様式の建物がずらりと並んでいます。そうした点で、リングシュトラーセは、建築文化的には城内区の拡大を意味していました。新興のウィーン・ブルジョアジーたちは当時まだ独自の建築様式を発展させる余裕はなかったのです。

1870 年代から 80 年代になって、軍部の練兵場としてリングシュトラーセに残されていた広大な地所がウィーンのブルジョアジーに与えられ、彼らは、そこを自らの政治的文化的な表現の場にしようと考え、市庁舎、国会議事堂、大学、劇場を建設することにしたのです。そして、それらの建設にあたって、

図 6. 「法と文化の四辺形」遠景

ウィーンのブルジョアジーがようやく考えついたのは、「時代主義」とでもいうべき建築様式でした。後に、前出のショースキーによって「法と文化の四辺形」と呼ばれたリングシュトラーセのこの一画は、まことに不思議な雰囲気を醸し出しています。なぜなら、ウィーンのブルジョアジーは、それぞれの建物の用途にあった様式を、歴史のなかから探し出して採用したからです。市庁舎には、市民の自治がもっとも栄えた時代のゴシック様式を採用し、大学には文化の栄えたルネッサンス様式を適用しました。さらにブルク劇場には、演劇を通じて市民と貴族が共同意識をもったといわれる初期バロック様式が導入されたのはよいとして、国会議事堂には、事もあろうに、民主主義の発祥の時代である古典古代様式の神殿が相応しいと考えたのです。議事堂前には、後にはアテナ像まで建てられました。それぞれの建物が、当時のウィーンのブルジョアジーの総力を結集して建てられただけに、その規模は壮大で、それだけに現在そこに

立つ人々は極めて大きな違和感を覚えずにはおかないでしょう。ゴシックの隣にギリシャ様式がならび、右を見ればルネッサンス様式が、後ろを振り返ればバロックがあると云うのですから。しかし、人には好みというものがあり、後にこの一画をこよなく愛し、毎日のようにスケッチブックをもってここをうろついていた青年がいました。彼の名はアードルフ・ヒトラーと言って、オーストリアの田舎町の出身の画学生志願者でした。その話は後に触れることになります。

リングシュトラーセ文化の批判者たち

さて、こうしたウィーンのブルジョアジーによる「リングシュトラーセ文化」は、1874 年の経済恐慌にもかかわらず、1880 年代から 90 年代にかけてその最盛期を迎えることになります。その文化は、現在でもウィーンを彩り、リングシュトラーセを巡る市電にのって廻れば、今なおその豪華さを存分に確認することができます。しかし、その豪華さは見るものに何か前近代的な印象を与えます。当時の人々の中にも、ウィーンのブルジョアジーの「時代主義」に違和感を感じた人々がいました。そうした人々が、我々のテーマである世紀末文化の主人公たちです。

まず、大都市として発展するウィーンの建設に直接かかわった建築家オットー・ヴァーグナーから見てみましょう。日本ではあまり知られていないヴァーグナーも、ウィーンでは知らぬ人がないほど有名ですし、日本でも建築家のあいだではよく知られています。そのヴァーグナーは、1895 年のまさに世紀末の時代に、『近代建築』という著作を著わし、リングシュトラーセの「時代主義」的建築を「老残の身を曝す形式の世界」として、徹底的に批判します。一文を引用します。「一つの思想が本書全体を鼓吹している。それは、我々の芸術創造の唯一可能な出発点は近代生活だという認識を以て、今日の支配的な建築観の基礎全体を取り換えねばならない、という思想である」（ショースキー、101 頁）。そうした思想を根源に、ヴァーグナーは、コンペなどを通じて大都市ウィーンの建設に積極的に関与していきました。ヴァーグナーは、最初はリン

図 7.　オットー・ヴァーグナーによる市街鉄道建設

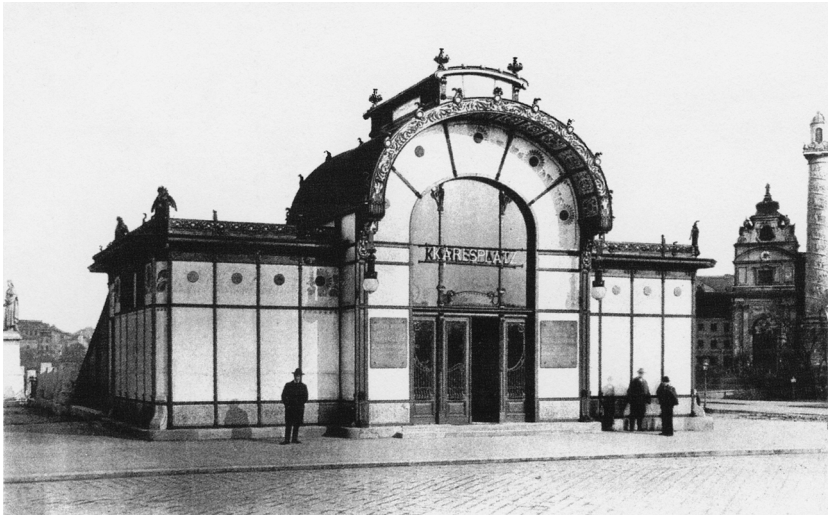

図 8.　オットー・ヴァーグナー「カールス広場駅舎」

グシュトラーセに幾つかのアパートメントハウスを建設し、その文化のなかで活躍しますが、しだいにリングシュトラーセ様式から脱出しはじめ、装飾を排除したすっきりした壁面を使用し、とくに 1894 年にウィーン市街鉄道建設の主任に任命されると、あらゆる部門でこれまでのものとはまったく異なる様式を採用してウィーンの街を改造していきます。彼は、30 以上の駅舎や橋をむき出しの鉄やガラスを使って製作し、ウィーン川の調整工事をかねてそこに鉄道を走らせました。1898 年には美しい花模様の壁面をもつマヨルカハウスを建設。1904–06 年には、発明されたばかりのアルミをむき出しの留め金として使用した郵便貯金局を建設し、ウィーン人を驚かせます。ヴァーグナーのモットーは、「必要こそ芸術の奉仕する唯一の主」、「芸術と目的の一致」、「新しい建築技法、新しい材料、新しい人間の課題 . . .」といったもので、1899–1905 年には、後に述べる「分離派」の会員になっています。

このようなオットー・ヴァーグナーの例が示すように、ウィーンの「世紀末文化」はまさに「リングシュトラーセ文化」の「時代主義」に対する批判をテコとして出現したものなのです。もう一人、当然みなさんが期待し待っている人物をとりあげねばなりません。もちろん日本でも美術に関心のある人のほとんどが知っているグスタフ・クリムトです。

クリムトとシーレ

このクリムトも、最初は「リングシュトラーセ文化」の担い手でした。クリムトは、1888 年に完成するブルク劇場の天井画や壁画を旧来のアカデミズムの様式で描き、1891 年にはまだ美術史美術館のアテネ像などの女性像の連作を描いていました。その延長上で 1894 年には、新設の大学の記念講堂に「哲学」「医学」「法学」の 3 つの天井画を描くことを、文化省に依頼されることになります。そのテーマは「闇に対する光の勝利」というものでした。しかし、クリムトがその最初の下絵「哲学」ついで「医学」を提出した 1900 年と 1901 年には、クリムトはすでに「分離派 Seccession」を立ち上げて、芸術アカデミーからの決別を宣言し、その伝統的様式から離れていたのです。それは 1897 年

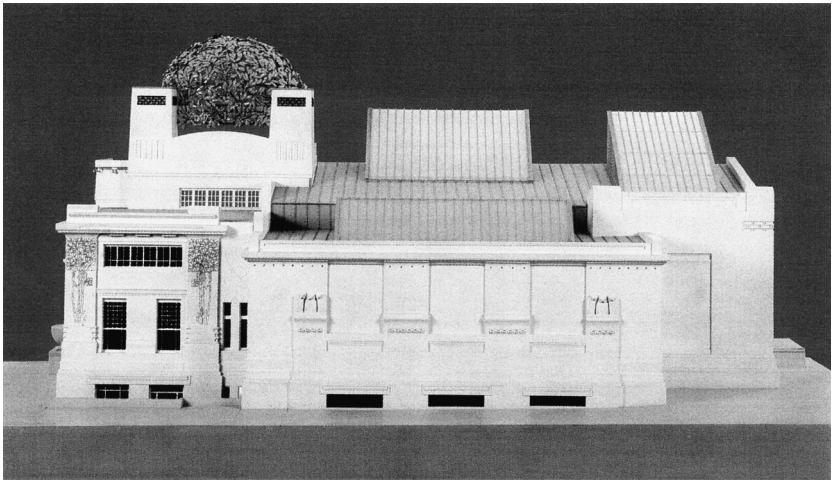

図 9.　ヨーゼフ・マリア・オルブリヒ作「分離派展示館」（模型）

のことでした。「分離派」は、その独自の展示場である「分離派展示館」（オルブリヒ作）の正面に書かれているように「時代にはその芸術を、芸術にはその自由を」をスローガンとし、「リングシュトラーセ文化」の時代主義と伝統主義を徹底的に批判していました。ウィーンのブルジョアジーは、その独自の芸術を開発できなかったのだ。我々は独自の芸術を展開してみせると。ですから、クリムトが依頼された大学の天井画「哲学」は、これまでの伝統的な天井画の様式とはまったくかけ離れ、「闇に対する光の勝利」というテーマを豊満な裸婦と怪獣(スフィンクス)を軸に奔放に描いたものとなり、アカデミックな大学教授たちから拒否されるという事態をまねき、大変な騒動に発展してしまったのです。しかしクリムトはそうした批判に屈することなく、「医学」「法学」の絵をより過激な形で描いてみせ、この二つは遂には天井画として日の目を見ることがありませんでした。おそらくその怒りと過激さの延長上にあるのが、ベートーベン・フリーズと呼ばれる、今回その一部をポスターに使った「分離派展示館」の壁画でした。その後、クリムトの画風は変わり、肖像画や有名な「接

図 10. グスタフ・クリムト《法学》、1903 年（1945 年に焼失）

吻」といった具象的ないし象徴的な題材を選んで書くようなります。それをどのように評価するかは皆さんにお任せするとして、少し先をいそぎます。

クリムトの弟子であるエゴン・シーレは、その師匠の画風を継承しながら、独自の表現主義的ないし即物的ともいえる素描や絵画を残しますが、クリムトのような伝統との闘いや自己変革の苦しみを経験することなく、1918 年つまりクリムトと同じ年に、スペイン風邪で 28 歳の若さでなくなります。（ちなみにクリムトは 58 歳でした。）シーレの闘いは、むしろ純粋絵画的な表現方法とそれを理解しない社会とのものであったかもしれません。シーレの暗い人を刺すような絵画は、ベェルヴェデーレ宮殿の美術館で見ることができますが、最近、

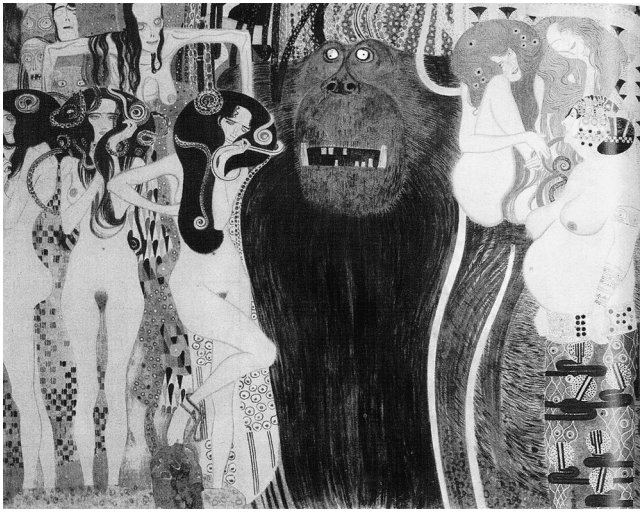

図 11.　グスタフ・クリムト「ベートーベン・フリーズ」(部分)

ウィーンの新しい美術館レオポルト美術館で、少年の頃からのデッサンを含めて、数多く見られるようになりました。ただし、この美術館にシーレの絵画を寄付したレオポルトという画商は、ナチ時代に頽廃美術として排除され買い叩かれたシーレの絵を何らかの手段で手に入れたのではないかという怪しげな風評があり、実際に彼がニューヨークに貸し出したシーレの絵が、元の所有者の訴えにより差しおさえられるという事件もおこりました。

さて、こうした「分離派」の中からは、さらに日常生活のなかに芸術性を持ちこもうとした人々も現れます。もともと建築家であるヨーゼフ・ホフマンと画家であり工芸家であるコロマン・モーザーで、彼らは、ユーゲントシュティール(フランスのアール・ヌーヴォーをウィーンではこう呼んでいます)を、生活のなかで使用される机や椅子、タンスや引き出し、壁紙やカレンダー、織物や食器といったものにまで(あるいは、そうしたものにこそ)持ち込み、1903年には「ウィーン工房」という「芸術的手工業者の生産協同組合」を立ち上げました。それは世紀転換期のウィーンのカフェや店舗の様相に彩りをあたえた

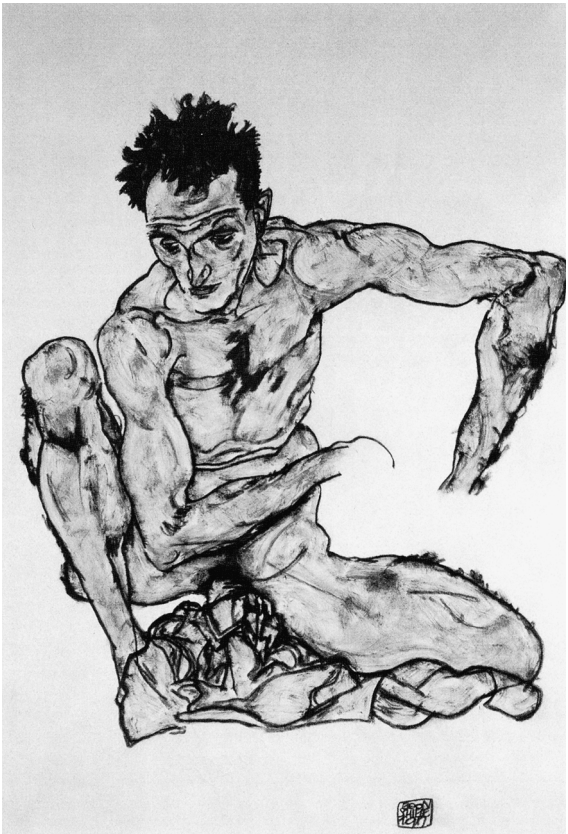

図 12. エゴン・シーレ「ハインリッヒ・ベネシュの肖像」

だけではなく、国際的にもおおきな影響力をもちましたが、世界恐慌の影響を受け 1932 年にその活動を停止してしまいました。この「ウィーン工房」の成果は、現在はウィーンの市立公園に隣接する「応用美術博物館」で見ることができます。

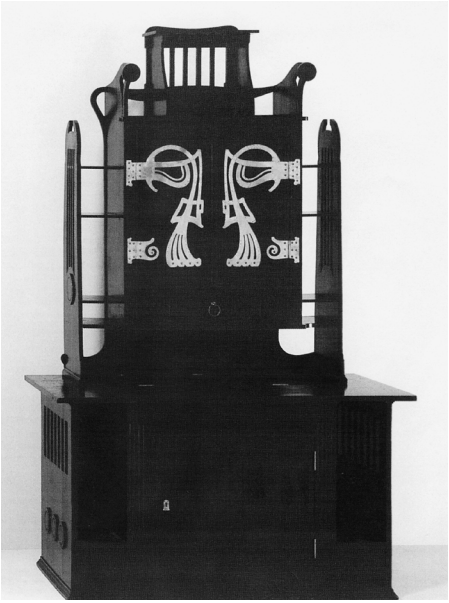

図 13.　ヨーゼフ・ホフマン作 戸棚

図 14.　ヨーゼフ・ホフマン作 キャバレー・フレーダーマウスの椅子

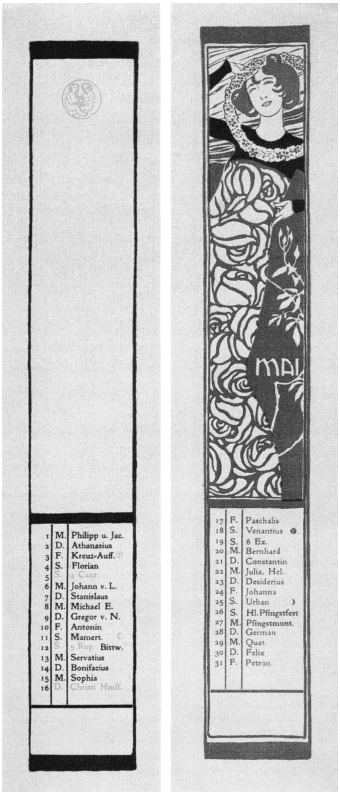

図 15.　コロマン・モーザー作のカレンダー

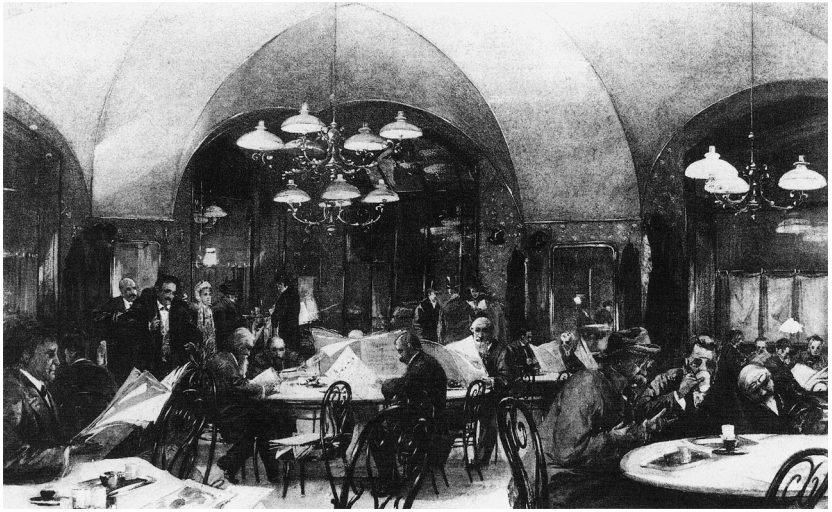

図 16. カフェ・グリーンシュタイドル・文学運動「青年ウィーン」の拠点となった。

精神文化の新展開

こうしたウィーンの建築、美術そして室内装飾といった目に見える生活様式の転換とならんで、世紀転換期には人々の精神生活に大きな変化がみられます。すでに長い伝統をもつ文学の世界では、世紀の転換をまえにした 1890 年頃に、「カフェ・グリーンシュタイドル」を中心に「青年ウィーン Jung Wien」(「若きウィーン」「ウィーン青年派」とも呼ばれる) が形成されます。そのメンバーはアルトゥール・シュニッツラー、フーゴー・フォン・ホフマンスタール、ヘルマン・バールたちであり、放縦な作家ペーター・アルテンベルクもときたまその会合に参加していました。彼らは印象主義や象徴主義を擁護し、オーストリアないしウィーン独自の文学の方向を探ろうとしたのです。こうした「カフェハウス文学」を痛烈に批判したのは、劇作家のカール・クラウスで、彼は 1899 年に雑誌『炬火 Fackel (タイマツ)』を創刊し、世紀転換期の文学に対して厳しい論陣を張りました。しかし、世紀転換期の文化はそうしたカール・クラウスを包含して展開していきます。

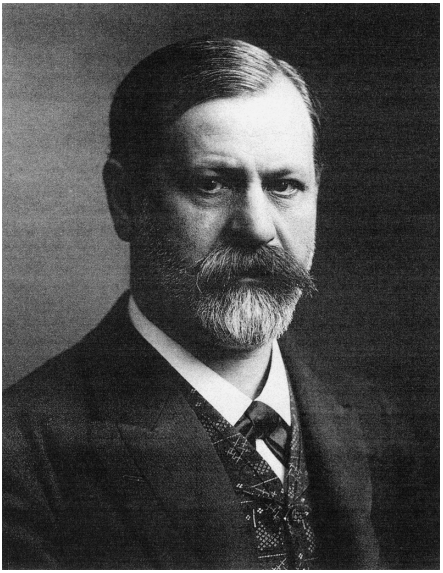

図 17. ジクムント・フロイト(1856–1939)。精神分析学の創始者。モラヴィアのユダヤ商人の家に生れ、4歳でウィーンに移住。ウィーン大学医学部で学ぶ。

学問世界においても、この世紀転換期に、これまでの「常識」を打ち破るようなさまざまな知見が新たに付け加えられます。ジグムント・フロイトが著名な『夢判断』を著わしたのはちょうど1900年のことであり、彼によって新たな精神分析学といわれる分野が開発されました。物理学から哲学、美術から数学まであらゆる分野において一家言をもち、音速単位の「マッハ」にその名を残すエルンスト・マッハもこの時代を代表する学者であるといってもよいでしょう。同様に広範囲の学問を守備範囲としていたオットー・ヴァイニンガーも、1903年に『性と性格』を著わし、自らの自殺未遂を契機によく読まれました。ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインと結びついて哲学の「ウィーン学派」ができるのは、少し後の第一次世界大戦の後であり、その頃にはオーストリア・マルクス主義に対抗する「オーストリア経済学」派も形成されてきました。

図 18. グスタフ・マーラー(1860–1911)。作曲家、指揮者、ボヘミアのユダヤ家系に生れ、後にウィーン・オペラ座の総監督になる際に改宗した。

ウィーンにとっては極めて重要な芸術分野である音楽については、グスタフ・マーラーとアーノルト・シェーンベルク、アレクサンダー・ツェムリンスキーの 3 人の名を揚げておくだけで十分でしょう。マーラーはウィーン歌劇場の指揮者として、シェーンベルクは 12 音階の創始者として、ツェムリンスキーはシェーンベルクの先生として、それぞれオペラ座、フォルクス・オーパー、学友協会などで活躍し、世紀転換期のウィーン音楽界をリードしました。

世紀末文化の担い手の問題

さて、ウィーン世紀末文化といわれるこうした文化は、19 世紀後半から 20 世紀の初めにかけてその最盛期を迎え、その後のウィーンに大きな財産を残したといってよいでしょう。こうした文化はいったいどのような歴史的条件の下

に、どのような人々によって担われてきたのでしょうか。そして、なぜそれが過去のものになってしまったのでしょうか。

これまでしばしば言及した『世紀末ウィーン』の著者であるショースキーは、この世紀末の文化を、全体としてウィーン・ブルジョアジーの古典的自由主義文化に対する若者のオイディプス的反逆としてとらえています。たとえば、ショースキーはこう言います。「フロイトを生んだ都市の新しい文化創造者たちは、こうして繰り返し一種のエディプス的反逆という形で自己規定を行った。けれども、若者たちが反逆していたのは、彼らの父親たちにたいしてというよりも、むしろ彼らが受け継いだ父親たちの文化の権威に対してであった。彼らが広い戦線にわたって攻撃を加えたのは、自分たちを育てた上昇期の古典的自由主義の価値体系だった」（ショースキー、11〜12 頁）と。

こうしたショースキーの結論は、ウィーン世紀末文化の性格を「マルクスからフロイトへの転換」と評する彼の視点からなされたものです。その「転換」とは、この世紀末ウィーンにおいては、フロイトは、そして人々は物事の判断を「公的・社会的な領域」から「私的・心理学的な領域」に移していったというのです（ショースキー、8〜9 頁）。ショースキーが、フロイト流に反逆者たちの内面の分析に重きを置く限り、こうした結論は正しいかも知れません。しかし、そのことによってショースキーは、ウィーン世紀末文化における重要な社会的要素を捨象してしまったと、私には思われるのです。そこで、ショースキーが「マルクスからフロイトへの転換」と呼んだ転換を、ここではもう一度反転させて、この世紀末文化の担い手の歴史的な分析にたちかえってみたいと思います。そのことは同時に、ウィーン世紀末文化発祥の二つ目の要因を説明することになります。

ウィーンへの流入民

ウィーンが大都市として成立してくるに際して、当然のことながら、多くの流入民をうけいれたということは、前に触れておきました。具体的に見てみましょう。まず、人口数ですが、ウィーンは 1800 年に概数で 23 万の人口を抱え

ていましたが、最初の国勢調査がおこなわれた 1851 年にはその数は 43 万人になっていました。しかし、19 世紀後半の成長ははるかに大きく、1880 年には 100 万人の壁を突破し、1900 年には 164 万 8 千人に膨れ上がります。この急激な人口増加は、そのほとんどが流入民によるものとみなされます。1851 年の統計は、24 万のウィーン人口のうち流入者の割合は 40% としているが、その数は次第に増え 1880 年には 60% を越えていきます。その後統計の取り方も変わってきますが、統計上の「ウィーン生まれの者」の割合は 1900 年にも 46.4% と半数を下回ります。この間に都市としてのウィーンの領域も拡大され、もとの城壁の外の「市外区」が拡大されたり「郊外町」が併合されたりし、そうした地域に設立された工場に働く労働者や手工業者・雑業層がふえていきます。1890 年の統計では、市内区の人口は 5% に過ぎず、市外区には 50%、郊外町には 44% の住民が住んでいました。

そうした流入民はどこからきたのでしょうか。1890 年のウィーン住民の出生地をみてみると、「ウィーン生まれ」が約 45% なのに対して、現在のチェコ領である当時のベーメン / メーレン / シュレージエン生まれの者は 28%、ハンガリーやガリツィア(現在のポーランド南部)などに生まれた者 12%、現在のオーストリアの下オーストリア州生まれが 11%、その他の州に生まれた者が 4% という数字があり、ウィーンの流入民はハプスブルク帝国の各地から入ってきたことが分かります。そしてその中には数多くの「ユダヤ教徒」が含まれていました。

当時の統計では、そしてナチ時代を除くその後の統計でも、「ユダヤ」とは「ユダヤ教を信仰している者」=「ユダヤ教徒」のことで、「ユダヤ人」という人種がいるわけではありません。(ただし、「ユダヤ」をネイションとみなす考え方はあったが、ここではその問題には触れない。)その「ユダヤ教徒」の統計によれば、19 世紀の後半とくに 1869 年に移動の自由が認められると、ウィーンのユダヤ教徒の数は急速に増えていきました。1848 年に約 4000 人であったユダヤ人口は、1869 年に 4 万人、1880 年には 7 万 3 千人(人口の 10.1%)となり、その後のウィーンの人口増加によりパーセンテージは減少するが、1890 年には

図 19. ウィーンのユダヤ教徒。世紀転換期のウィーンの人口の約 10% はユダヤ教徒であった。とくに東方から流れ込んできた「正統派」ユダヤ教徒たちは、昔からの教義や伝統を守り、反セム主義者からは「異邦人」扱いされた。彼らの多くは 2 区のレオポルトシュタットに住んでいた。

11 万 8 千(8.7%)、1900 年には 14 万 6 千人(8.8%)、1910 年には 17 万 5 千人(8.6%)と、その総数は増え続けていきます。ユダヤ教徒の流入民の特徴の第一は、1848 年革命後比較的早めにウィーンにやってきたこと、そしてその中には

比較的裕福な家族が多く、ウィーンにおいても商売に成功していったことです。もちろん単身でやってきてうまくいかずに貧しい生活を強いられた者もいました。第二には、彼らは宗教上の理由もあって、一定の地域に集住したことです。特に彼らが住んだのは、ウィーンの第二のゲットーがあった第 2 区のレオポルトシュタットでした。（レオポルトというのは、1670 年にゲットーを取り壊し、ユダヤ教徒を追放した皇帝の名前です。）そこに住むユダヤ教徒は全体の 1/3 にのぼりました。第三に、これはユダヤ教徒全体にいえることですが、彼らは子弟たちに可能な限り高等教育を受けさせたことです。シュテファン・ツヴァイクが『昨日の世界』において書いているように、「精神的なものの優位ということは、ユダヤ教徒全般をつうじてあらゆる階級にゆきわたっている」（29 頁）ものだったのです。ある研究によれば、19 世紀後半から 20 世紀はじめにかけてギムナジウムに通うユダヤ教徒家族の子弟のパーセンテージは場所によっては 70% にのぼり、平均すると 30% 前後であることが知られています。大学教育においても、とくに医学と法学において高いパーセンテージを占めていました。そうです、ここから我々のテーマであるウィーン世紀末文化の担い手たちが現れてくるのです。

文化の担い手としてのユダヤの人々

詳しいことを述べる時間がありませんが、簡単に見てみましょう。上に述べたのとは逆の順序でいきますと、まず、音楽の分野で新機軸をだした 3 人、マーラーとシェーンベルク、ツェムリンスキーの 3 人ともユダヤの家庭の子弟でした。音楽とくに弦楽器はユダヤの人々の得意とする分野でした。哲学の分野では、ヴィトゲンシュタインはもとより、後の「ウィーン学派」と呼ばれたグループ 14 名の名簿のうちユダヤ系(こういう言い方をするときには、ユダヤ教徒の家庭に育ったが改宗してユダヤ教徒でなくなった人を含めて考えています。それは決して人種的な考え方ではありません)とされる人たちは 8 名いました。医学におけるユダヤ系の人々のパーセンテージはかなり高いが、その数値化は難しい。しかし、ユダヤ系であるフロイトを訪れる患者はほとんどユダ

ヤ系の人々であったし、1906年まで精神分析運動に参加していた医者はすべてユダヤの人々でした。ついでながら、フロイトの同僚であったヴィクトーア・アードラーは、医者として10区のチェコ人レンガ工の中に入り、後にオーストリア社会民主党の指導者になっていきました。その社会主義運動の理論家たちの大部分がユダヤ教徒の家の出身者でした。第一次大戦後に首相となるカール・レンナーが例外的にユダヤ系でなかったといってもよいほどです。

文学運動においては、ほとんどの人がユダヤの出自をもっています。たとえば、1891年にシュニッツラーが作成した「青年ウィーン」の25名の参加メンバーのうち16名がユダヤ系でした。「オーストリア経済学」派も、ルートヴィヒ・ミーゼスに指揮された戦間期にはほとんどのメンバーがユダヤ系でした。

しかし、オットー・ヴァーグナーもクリムトもユダヤ系の家の出身ではありませんでした。音楽の世界と異なり、偶像崇拝を否定してきたユダヤ教の世界では、絵画や彫刻に進出する人材は例外的にしか出てこなかったのです。しかし、ホフマンやモーザーとともに「ウィーン工房」を立ち上げ、資金の大部分を提供したのはユダヤ系の実業家フリッツ・ヴェルンドルファーでしたし、分離派の展示場の標語を考え出したのは、ユダヤ系の評論家のルードヴィヒ・ヘヴェシュでした。クリムトが保守的市民の批判を浴びて不遇をかこっていた時に、肖像画をかかせて彼を支えたのはユダヤの富豪たちであったし、彼らは「ウィーン工房」のよき理解者であり、消費者でもあったのです。

このように、精神的にみても、あるいは社会的経済的に分析しても、われわれのウィーン世紀末文化は、こうしたユダヤの人々なしには考えられないものであったとみることができます。そうするとショースキーのいうように、この文化がウィーン・ブルジョアジーの古典的自由主義文化に対する若者のオイディプス的反逆と説明するだけでは不十分であることは明らかでしょう。これから証明していかねばならない仮説として、差し当たり次のように纏めておきたいと思います。ウィーン世紀末文化とは、近代化され大都市化したウィーンに流れ込んできたユダヤ的文化の担い手たちが、キリスト教的タブーにとらわれた思考方法を打破し、独自の精神文化を模索するなかで生まれてきた、まさ

図 20. カール・ルエーガー(1844–1910)。反ユダヤ主義の宣伝により「キリスト教社会党」を創設し、ウィーンの市長となった。

にこの時代に独自な現象であった、と。その際彼らは、同時にユダヤ教的な束縛からも解放されていったことも付言しておかねばならないでしょう。

ウィーン世紀末文化の破壊者

本来ここでさらにこの文化を破壊していったものが何であったのかを説明しておかねばならないのですが、時間がないので簡単に述べるにとどめます。簡単にいえば、それはウィーンにおいて極めて強かった「反ユダヤ主義」「反セム主義」でした。ユダヤ教徒の流入が極めて多かったということ(ウィーンでは人口に対するユダヤ教徒の比率は最大 10% であったのに対してベルリンでは 3% にすぎない。しかし、ブダペストやワルシャワでは 30% でした)が、反ユダヤ主義を強めたことも確かですが、それだけではありません。多民族的な帝国と

図 21.　1938 年ナチス・ドイツによるオーストリア「合邦」後、ヒトラーを歓迎し、ウィーンの英雄広場を埋めつくした人びと。

して民族意識が強化され、その共通の敵としてユダヤ教徒が生け贄の羊となったことも考えなければなりません。さらに、根強いカトリックとの関連も考えなければなりません。

いずれにせよ、1907 年から 1913 年までこのウィーンに滞在していたヒトラーは、『我が闘争』のなかで述べているように、徹底的な反ユダヤ主義者となってウィーンを去ります。そのことは、当時のウィーンがいかに強い反ユダヤ主義的土壌をもっていたかを示しています。ヒトラーは同じく『我が闘争』のなかで、自分の反ユダヤ主義の師として、ウィーンのゲオルグ・シェーネラーとカール・ルエガーの名を挙げています。ヒトラーは彼らを批判して彼の反ユダヤ主義を強化していくのですが、この 2 人はまさにウィーン世紀末文化の最盛期に活躍していました。その強固な下地の上に、さらに第一次世界大戦

と帝国の崩壊がおきます。戦争中に難民として貧しきユダヤ教徒たちが帝国東部からウィーンに流れ込み、戦後の反ユダヤ主義はさらに強まります。オーストリア・ファシズムの成立が世紀末文化を制限し、ナチの支配とともにオーストリアの土着の反ユダヤ主義ないし反セム主義が、ユダヤの人々の追放と絶滅を計りました。ウィーン世紀末文化の担い手であったユダヤの人々は、運が良ければ亡命に成功しましたが、多くの者たちが強制収容所に連行されていきました。

こうしてウィーン世紀末文化は、最終的には反ユダヤ主義ないし反セム主義によって終止符を打たれてしまいました。その反ユダヤ主義は決してドイツのナチズムからの借り物ではなく、ウィーンにおいて長い歴史をもつ土着的な反ユダヤ主義であったのです。むしろナチズムの方が、ヒトラーだけではなく、他のさまざまなチャンネルを通じて、このウィーンの土着的な反ユダヤ主義から多くのことを学んでいるのです。その点に関しては、別の機会にお話したいと思います。

［以上の文章は、2005 年 7 月 23 日におこなわれた「獨協大学オープンカレッジ特別講座」の原稿に多少の手を加えたものである。］

［主要参考文献（図版・写真を含む）］

カール・E・ショースキー / 安井琢磨訳『世紀末ウィーン—政治と文化—』岩波書店 1983 年
W. M. ジョンストン / 井上修一他訳『ウィーン精神 ハプスブルク帝国の思想と社会』I, II, みすず書房 1986 年
A. シュニッツラー / 田尻三千夫訳『ウィーンの青春 ある自伝的回想』みすず書房 1989 年
シュテファン・ツヴァイク / 原田義人訳『昨日の世界』I, II, みすず書房 1999 年
ヨーゼフ・ロート / 平田達治他訳『放浪のユダヤ人』法政大学出版会 1985 年
『ウィーン世紀末 クリムト、シーレとその時代』セゾン美術館 1989 年
バーバラ・ジェラヴィッチ / 矢田俊隆訳『近代オーストリアの歴史と文化—ハプスブルク帝国とオーストリア共和国』山川出版社 1994 年
野村真理『ウィーンのユダヤ人 19 世紀末からホロコースト前夜まで』御茶の水書房 1999 年
村山雅人『反ユダヤ主義 世紀末ウィーンの政治と文化』講談社 1995 年
増谷英樹『歴史のなかのウィーン—都市とユダヤと女たち』日本エディタースクール出版社 1993 年
増谷英樹『ビラの中の革命—ウィーン・1848 年—』東京大学出版会

増谷英樹「アイヒマンの『ウィーン・モデル』」、『Quadrante』4号(2002年)
増谷英樹「19世紀後半のウィーンの流入民と同化の問題—チェコ人とユダヤ教徒の比較」『Quadrante』5号(2003年)
Gerhard Botz, Ivar Oxaal, Michael Pollak (Hg.), Eine zerstoerte Kultur. Juedisches Leben und Antisemitismus in Wien seit dem 19.Jahrhundert, Buchloe 1990.
Marsha L. Rozenblit, Die Juden Wiens 1867–1914. Assimilation und Identitaet, Wien / Koeln / Graz 1989.
Brigitte Hamann, Hitlers Wien. Lehrjahre eines Diktators,Muenchen 1996.
Hellmut Andics, Ringstrassenwelt. Wien 1867–1887. Luegers Aufstieg, Wien / Muenchen 1983.
Peter Czendes, Geschichte Wiens, Wien 1981.
Traum und Wirklichkeit Wien 1870〜1930. 93. Sonderausstellung des Historischen Museums der Stadt Wien, Wien 1985.
Felix Czeike, Wien. Geschichte in Bilddokumenten, Muenchen 1984.
Reinhard Pohanka, Das alte Wien. Freud und Leid in der k, k. Haupt- und Residenzstadt Wien auf alten Photographien 1850–1914, Wien 2000.

[図版・写真出典]

図 1.『近代オーストリアの歴史と文化』
図 2, 5, 7, 16, 17, 18, 20. F. Czeike, Wien.
図 3. 増谷英樹『ビラの中の革命』
図 4, 6, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15.『ウィーン世紀末』
図 9, 21. 増谷英樹『歴史のなかのウィーン』